

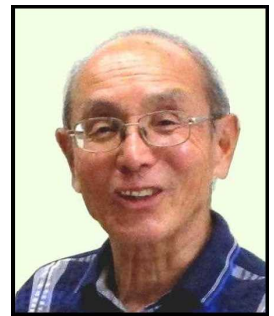
東海の古代

第298号 2025年6月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

「東海古代研究会」の畑田壽一会長 永眠

畑田壽一さんは、令和3年（2021年）10月に東海古代研究会の会長に就任され、4年にわたり当会の発展に努めてこられました。令和6年末頃から体調を崩されたものの本年3月の例会には参加され、会の進行とともに自らの論考を発表されましたが、再入院後から1ヶ月ほど経過した令和7年5月にお亡くなりになりました。たいへん温厚で柔和な人柄であり、古田武彦説に拘らない考えや幅広く様々な意見を聴くことに努められ会員相互の活発な議論を促されました。



愛知サマーセミナーや古田武彦記念古代史セミナーを担当されたほか、会の掲示板や「東海の古代」の検索ソフトを自ら作成し配布されたことは特筆すべきことと思います。

そのご尽力に敬意を表しつつ畑田さんのご冥福をお祈り致します。

『後漢書』の邪馬臺国を読む

名古屋市 田沢 正晴

1. はじめに

古田武彦氏が1969年に「邪馬壹国」と題する論文を『史学雑誌』に発表されてから50数年が経過しているが、いまだに邪馬壹国は邪馬台国と通称されており、邪馬壹国が市民権を得ているとは言い難い。『魏志』倭人伝には「邪馬臺国」ではなく、「邪馬壹国」と記されていたと主張するには、それが『後漢書』で「邪馬臺国」に改変された理由を明確に説明すべきであるが、それを怠ったことも邪馬壹国論者の弱点かも知れない。

これまでに、改変理由の説明はほとんど見かけないばかりか、その議論さえ聞こえてこない。そこで邪馬壹国説を採る一人として、ここに試論を述べる。

2. 邪馬壹国などの地名は倭語で読む

『魏志』倭人伝には現然と「邪馬壹国」と記されているにも拘わらず、邪馬台国の呼称が未だ広く使われているのは、江戸前期の国学者松下見林が『異称日本伝』で「壹は臺の誤り」として原文を改定したことに端を発している。「臺」は「台」であり、「台」であれば「と」と読めるので、邪馬臺は大和であると、明確な根拠を示さず決めつけてしまった。

台は臺の略字ではなく別字であるとの認識すらなかったようだ。

つまり、邪馬台であれば何とか「やまと」と読めても、邪馬臺は「やまたい」であり「やまと」とは読めないのである。松下見林の江戸期から明治を経て、昭和の古田武彦氏が異を唱えるまで、大多数の研究者は「邪馬壹国は邪馬臺(台)国の誤り」との認識で凝り固まってしまった。

ここで、古田氏の邪馬壹国説を改めて振り返ってみたい。私が一番説得力があると思うのは、《「臺」は「三国志」において、天子の宮殿とその直属の中央官庁を意味している。そんな神聖至高の文字を、「邪・馬」といった卑字に連続して使うはずがない。》(a)とした部分である。これとは逆に、理解できないところもある。

それは、《倭音訓読にもとづく地名比定を出発点とすべきでない》(a)との主張と、それに関連して《邪馬壹の壹は、「天子に二心なく朝貢する」という特別の歴史的由来を持つ語である》(a)との見解である。

私は、『魏志』倭人伝に登場する倭国の地名は、その多くが地形に関連する倭語で構成されていると考える。例えば末盧国は「まうら」＝「真浦」(b)、伊都国は「いつ」＝「入津」(c)、奴国は「ぬ」＝「沼」(d)である。続いて不弥国は「草原」(e)。これらと同様に、邪馬壹国は「やまゐ」すなわち「山堰」と解釈できる。この「堰」とは「ゐ」と読み、貯留、取水のために川の水をせき止める構造物をいう。堰をゐと読むのは、京都嵐山の渡月橋近くにある葛野大堰かどのおおいなどの例がある。

地名と言うものは、多少の音韻変化はあるものの、3世紀のものが現代まで遺存する可能性は充分考えられる。現に邪馬壹は八女市の山ノ井川にその名を残している。見方を変えて、yamai は連母音融合で yame に変化して八女となったとも言える。連母音融合というのは「無い」が「ねえ」のように変化することをいう。

地名としての「邪馬壹」は古田氏の説く「漢籍の歴史的由来」からではなく、倭語から比定地を導くべきだろう。邪馬壹の「壹」、邪馬臺の「臺」は、ともに漢語読みとせず、倭語（倭音）で読むべきと言うのが、本論考における私の基本的な考え方である。

3. 古田武彦氏の説明

冒頭で述べたとおり、『魏志』倭人伝に邪馬壹国と書かれていたことを主張するためには、後漢書を書いた范曄が、何故邪馬壹国を邪馬臺国へ書き換えたか、その理由を明らかにする必要がある。このことに関して古田武彦氏は、范曄が邪馬臺国に改定した理由は次の二つが考えられるとしている(f)。

- (1) 後漢時代(25～220年)には倭国の中心国は「邪馬臺国」であった、という信用すべき史料を范曄がもっていたための改定。
- (2) 今(5世紀)の認識において、倭国の中心国が「邪馬臺国」である、という現在事実にもとづいた改定。

上記(1)については、夷蛮の国が「一臺」と称しはじめたのは4～5世紀なので、1～2世紀に倭国だけ邪馬臺国と称したとは考えられない、との理由を付して(1)を否定されている。一方、(2)は、4～5世紀の五胡十六国は「臺の氾濫」にあり、倭国に「臺」の国名があっても不思議ではない、として肯定されている。要するに邪馬臺に変わった時期に関してのみ、氏は見解を示されているが、范曄が邪馬壹を邪馬臺に改定した理由、意図についての答えがなく、さらには「3世紀の邪馬壹国と5世紀の邪馬臺国は同一

王朝」とまで述べている(f)。理由を示さず、邪馬壹国は邪馬臺国に一字だけ何となく改変されたと言うのなら「壹は臺の誤記」説と大差はないと思うのだが、言い過ぎだろうか。

4. 范曄が邪馬臺国と改変した本当の理由

『後漢書』の編者范曄が邪馬壹国を邪馬臺国に改めたのは、「新しい事実を入手した」以外の理由は考えられない。『後漢書』の成立は早くても432年なので、倭王讃による421年、425年の宋への朝貢の後である。従って范曄が倭の使者と直接会った可能性もなくはない。使者が強く訴える新しい国名の音を直接もしくは間接的に伝え聞くに及んで、范曄は邪馬壹を邪馬臺に書き換えたのだろう。

范曄が『後漢書』で邪馬臺国と改変した中国側の理由は以上のとおりであるが、倭王讃が何故、邪馬臺国の名を宋にアピールする必要があったのか、倭の側から見た理由も突き止めておく必要がある。

讃を始めとする倭の五王が東晋、宋、齊などの南朝に遣使入貢したのは、朝鮮半島南部における権益を確保するのが最大の目的であったことに異論はないだろう。この目的を達するためには、高句麗と覇権争いをしていた倭が、高句麗に見劣りしないことを宋に示す必要があった。『魏志』倭人伝には、倭の支配地域は九州のみの狭い地域として描かれており、倭王讃はこのイメージだけでも払拭したいと考えたのだろう。讃の倭国は413年頃までは半島南部と九州を支配地域としていたが、讃は420年までに大阪平野に移動していた。倭が近畿に進出して広域国家となったことをアピールすることこそ、宋から認められるチャンスと考えたのである。

結果として、倭王讃は邪馬臺国の名を『後漢書』に残し、武帝から除授の詔を受けることには成功した。しかし、倭の使者は邪馬臺国は九州から大阪平野に移ったことを伝えたかったのに、范曄はそれを十分に理解出来ず、邪馬臺国の位置ではなく狗奴（拘奴）国の位置だけ修正したのである。『魏志』倭人伝には狗奴国は邪馬壹国の南とされていたが、後漢書は狗奴国を拘奴国と改定したうえで、その位置を次のように記している。

自女王國東度海千餘里至拘奴國（女王国より東に海を渡って千余里で拘奴国に至る）

5. 邪馬臺国は「やまだ国」

さて、ここで宋に赴いた倭の使者は、自国の国名をどのように発音したのかを考えてみたい。想定されるのは次の3つだろう。A：やまと B：やまだい C：やまだ

まずAの「やまと」を検証しよう。これを期待される方が最も多数を占めると推察されるが、前にも述べたように、臺は「と」と読めない。なおのこと、倭人の発音した「やまと」音を中国の人が、敢えて邪馬「臺」の字を選ぶとは到底思われぬ。ちなみに、伊都国は「いと」国とは読まず「いつ」国と読む可能性が高い。もし「都」を「と」と読むなら、「やまと」は「邪馬都」と表記するはずだろう。

次にBの「やまだい」はどうか。「やま」は倭語で「だい」は漢語の和訓である。倭漢混交となり違和感がある。なお、倭の使者が「やまだい」の音を伝えたのではなく、史書の著者である陳寿、范曄が「臺」の語をどうしても用いたがために、倭の地名「邪馬臺国」を自ら創作したという考え方も成り立つかも知れないが、これには私は賛成しかねる。

三つ目のCの「やまだ」と答える人は、ほぼ皆無だろう。倭国の首都が「やまだ」もしくはそれに近い地名だと言われても、倭国の都に相応しい「やまだ」の具体的地名が思い浮かばない。しかも「邪馬臺」を「やまだ」と読むとする研究者は、後漢中国語と呼ばれ

繰り返しになるが、倭王讃の使者は5世紀初頭に宋に赴き、倭国の都は「邪馬壹国」ではなく「やまだ國」であると訴えたのである。これを直接もしくは間接的に聞いた『後漢書』の編者范曄は、「やまだ」音が新事実であると確信して陳寿の「邪馬壹」を「邪馬臺」という文字に置き換えた。范曄が「やまだ」の音に「臺」字を用いたのは、倭国の使者が「やまと」の音に加えて、「臺」の語意も考慮に入れてその文字を当てるよう、強く願い出たからだろう。このように見る以外に『後漢書』に「邪馬臺国」と記された真の理由は考えられない。

さらに、倭王讃とも推定される応神天皇の行宮、難波大隅宮（大阪市東淀川区大隅）、仁徳天皇の難波高津宮（大阪市中央区高津）もこのエリアに含まれると考えれば、「山田国」は河内国から摂津国にまたがって相当な広さを持つと言える。



讃が加耶から大阪平野に移動したのは、413年以後、421年宋の武帝への朝献までの数年

間だろう。372年に讃の父母に百済から贈られた七支刀を、天理市の石上神宮へ運んだのも讃であるとすれば、讃が半島から大阪平野へ移動した証拠になる。5世紀初めに加耶から近畿へ大量の渡来人が来たこと、同じ時期に須恵器が百済から加耶を経て泉北丘陵に持ち込まれたことも、讃の大阪平野への移動説を補強する。

8. 倭王讃が加耶を離れた理由

続いて、加耶にいた倭王讃が加耶を離れざるを得なくなった理由についても確認する。まず、4世紀末から5世紀初めの半島情勢をみておこう。

391年 倭が百済と新羅を破り臣民とする。(好太王碑文)

396年 高句麗が百済を討伐した。(好太王碑文)

397年 百済が倭国に王子腆支を人質に送り国交を結んだ。(三国史記)

399年 百済は倭と和通した。新羅は倭の大軍に襲われた。(好太王碑文)

400年 新羅救済のため新羅王都の倭を攻撃。倭は退却した。(好太王碑文)

404年 倭が帯方地方に侵入してきたのでこれを討って大敗させた。(好太王碑文)

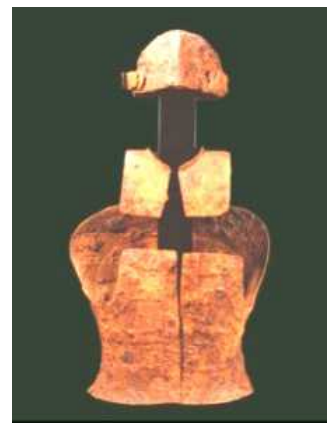
好太王碑の「倭」は近畿ではなく、北部九州に本拠を置き朝鮮半島南部の加耶に進駐していた倭人である。仮に倭が近畿であれば、その距離から見て10年以上もの期間、兵站を持続して確保するのは不可能と目されるからである。

『魏志』倭人伝に記された狗邪韓国は倭人の国であり、狗邪韓国を含む加耶地域とその周辺には、以前から倭人が定住していた。言うまでもなく、加耶地域の倭人は辰韓の鉄資源の獲得を目的として、加耶の本拠地である筑紫のほか出雲など列島各地に鉄を供給していた。ところが、391年に倭が百済と新羅を臣民としたため、両国を自らの属国と看做していた高句麗から攻撃される。一進一退の末、404年には大敗を喫することになる。

これを契機として加耶の讃は大阪平野への移動を決断する。

しかしこれは撤退ではなく戦力の立て直しである。加耶には兵力を残している。その証拠となるのが加耶の墳墓で出土した倭の甲冑である(i)。加耶では様々な階層の墳墓に、しばしば倭の甲冑が副葬されている。これは5世紀において、列島の倭人と加耶の倭人との密接な関係が絶えてはいなかった表れと見ていいだろう。

戦力を加耶に残して大阪平野に移動した倭王讃は、体制を整えて高句麗に再度挑む機会を窺っていたというのが、讃が加耶から離れた理由である。



帯金式甲冑

9. 倭の五王

大阪平野北部の開拓で経済力を蓄え、体制立て直しが完了すれば、大阪平野には用はなくなるので、朝鮮半島により近い北部九州に移動することは必然だ。讃の弟、珍は438年に宋に朝献し、倭隋ら13人の將軍号の除正を求め、許されている。加耶から移って間のない大阪平野周辺には、珍が随伴させたいと思う豪族は多くはなかったと想像されるので、倭隋ら13人は北部九州の豪族だろう。この時代の北部九州には、山鹿市、八女市などに新しい文化である装飾古墳(j)が多く見られることから、大阪平野からの移動先は偶然にも女王国(邪馬嘉国・邪馬壹国)の故地だったことになる。

倭王武の有名な上表文からも、武が北部九州を本拠としたことが分かる。

東征毛人五十五國、西服衆夷六十六國、渡平海北九十五國

海北95国が加耶エリアとすれば、東征55国と西服66国の合計121国は、面積比から考えれば、ほぼ九州内に収まるからである。

さて、倭の五王を天皇系譜に比定できるかと言え、ここまで述べてきたように、私は首肯できない。ヤマト王権の応神、仁徳から雄略までの天皇は讃、珍、済、興、武とは別人と考える(k)。その根拠の一つは、佐紀古墳群と古市・百舌鳥古墳群の築造時期が、一部重複していることである。加耶から移ってきたばかりの讃、珍は、古墳を造る文化を持っていないので、河内平野の巨大古墳群は倭の五王ではなく、ヤマト王権の王墓と考えられる。

それでは何故中国の皇帝は日本の正統でない人物を「倭王」としたのか。その答えは日本の南北朝時代の1369年にある。明の太祖は、倭寇の鎮圧を命じるとの国書をもって、後醍醐天皇の皇子、懷良親王かねよしを「日本国王」に冊封している。中国は自国に不都合さえなければ、簡単に冊封に応じるのである。

10. まとめ

論点を主張するには、根拠を明らかにすることが重要と考え、説明が冗長になったが、特に言いたかったのは次の3点である。

- (1) 邪馬壹国が『魏志』倭人伝に記されていたことを主張する論者は、邪馬臺国が中国史書になぜ突如現れたか、その理由を明確にする説明責任がある。
- (2) 『後漢書』の著者范曄が『魏志』倭人伝の邪馬壹国を邪馬台国に改めた理由は、倭王讃の使者が421年と425年に宋に赴き、魏の時代の邪馬壹国は宋の時代では大阪平野の「やまだ国」であるので、「邪馬臺国」と表記を改めるようお願い出たからである。
- (3) 倭王讃は朝鮮半島南部の加耶から413年以後421年までの間に、その本拠地を大阪平野へ移動した。その目的は二つある。一つ目は高句麗からの攻撃に対応するためである。目的の二つ目は、魏の時代には北部九州と朝鮮半島南部だった倭国の領域が、宋の時代には大阪平野まで広がり、高句麗に劣らない国であることを宋にアピールしようとしたことである。倭の五王は何れも朝鮮半島の権益確保に固執していたことが背景にある。

(a) 『「邪馬台国」はなかった』第5章

(b) 「ま」は接頭語でりっぱである、美しいなどの意を表す。「ま木」「ま玉」「ま弓」(学研全訳古語辞典)

(c) 「い」は入口の「入」。伊勢(瀬の入口)、伊豆(津の入口)も同様。

(d) 「奴」は沼。和名抄には「沼の和名は奴である」と書かれている。奴国が沼国で、今の久留米市三潞町としたことは、「東海の古代」第286号(2024年6月)を参照。

(e) 「ふ」は「生」で(草木が)繁茂している場所。「浅茅ふ」、「蓬ふ」。「み」は「回・廻・曲」で接尾語。地形を表す名詞について、・・・の湾曲したところ。・・・のまわり。「磯み」「浦み」「島み」「裾み」(学研全訳古語辞典)「ふみ」で草原の意となる。

(2)から(5)までと「やまゐ」で挙げた倭語の地名は、明確な根拠があるとは言えないが、少なくとも倭語らしさは感じて頂けると思う。

(f) 「失われた九州王朝」第1章Ⅱ

(g) 筑前国(宗像郡)、豊前国(上毛郡)、肥前国(基肄・佐嘉・高来の各郡)の5郷。和名抄以外にも平城宮官衙地区木簡に筑前国那珂郡と嘉麻郡の山田郷が見られる。安本氏の主張する朝倉市山田(筑後国生葉郡か)は和名抄に現れない。

(h) 「晋書」には讃の名はないが「梁書」に「晋の安帝の時倭王賛あり」とある。

(i) 「帯金式甲冑」加耶の墳墓で出土した倭の甲冑。国立大邱博物館蔵(5世紀中頃)高霊池山洞(コリョンチサンドン)32号墳

- (j) 装飾古墳は内部の壁や石棺に浮き彫り、線刻、彩色などの装飾のある古墳で、5世紀から7世紀ごろに九州の福岡県・熊本県に集中して作られた。全国で723例ある。福岡県桂川町の王塚古墳、八女市の石人山古墳、熊本県山鹿市のチブサン古墳などがある。
- (k) 倭の五王と応神などの大王を別人としているが、例えば、讃と応神は別人で讃は加耶から、応神は筑紫から同時期に大阪平野へ移動した、との仮説は成り立つ。応神と仁徳の同一人物説があることもそれを裏づける。

日本における寺院建築の変遷と神社建築 その1

刈谷市 酒井 誠

まえがき

これまで述べてきたように、日本古来より各地において磐座信仰や自然物を信仰の対象とした祈りは、それぞれの民族や個人が行ってきたものである。その信仰は、日本全体が統一して共通の信仰理念を持ち行ってきたものではない。そうした信仰形態の中で、信仰の統一した形態をもって日本に流入してきたのは紛れもなく仏教である。日本列島内の関係性の強かった半島を経由して、瀬戸内海を通して、近畿圏、東海圏までも広がっていった。『日本書紀』（以下書紀と記す）内には、欽明天皇の時代に百済への援助の見返りとして、文化のおすそ分けの中に、聖明王より仏像や経典が贈られたことになっている。奈良県の桜井市にある金屋に、そこは大和川すなわち初瀬川の上流部になるが、「仏教伝来之地」の石碑も建っている。しかし、実際はそれほど単純なものではなく、多くの伝来ルートが考えられて、仏教が広まっていったと考えられるのである。それを証拠に、飛鳥時代からの「廃寺」と呼ばれ、また「古代寺院遺跡」と呼ばれるものがいくつか見ついている。愛知県は、その伝来当初からの遺跡が残り、現在も視察可能である。代表的な「廃寺」として、岡崎市にある「北野廃寺」や「豊田市北部にある「舞木廃寺」が有名である。



＜岡崎市 北野廃寺＞



＜豊田市 舞木廃寺：塔心礎＞

北野廃寺は、四天王寺式で作られ大門、中門、塔、金堂、講堂が一直線に並んでいる。地下にある塔の礎石を見ることができる。舞木廃寺は、形式はわからないが、北野廃寺で使われた同範の瓦な出土しているために、同時代であり、二つの古代寺院の関係性を示すものである。

1 日本最古の寺院は何処か？

どう見ても最古の寺院は、明日香にある「飛鳥寺」である。現在は「安居院」と呼ばれていて、静かな小さな寺である。もともとは蘇我氏の本家の私寺であり、蘇我氏が総力を挙げて建設を行った寺である。平城京遷都により「元興寺」と名前を変えて移設された。

元興寺縁起によれば、6世紀末の587年に発願し、592年ないし593年ごろに建築を開始して、すべてが完成したのは7世紀の初頭と考えられている。確かにこの寺は、私寺であるが、これ以降に多くの豪族が私寺を建設しており、そうした動きが仏教を国家として奨励する方向に動いたものと思われる。飛鳥寺は、百済、高句麗との関係が強く残り、建設にあたっては、百済系の人々の参加が推察される。

1956年からの発掘で、創建当時の伽藍配置がもわかってきた。敷地の広がりや伽藍の特殊性が明らかになってきた。中央に塔を配置して、その周りを三つに金堂で囲む形になっている。この形式は、高句麗に多く見られ、百済からの建築技術者の中に高句麗系の人々が多く存在したことを暗示させる。



＜本尊；釈迦如来像＞



＜一塔三金堂の建築様式＞

さらに四天王寺と法隆寺とどちらが古いのかということが議論になるが、先に紹介したように、聖徳太子伝説を加味した四天王寺の演出には信ぴょう性はなく、今では、法隆寺の「若草伽藍」の遺物から見つかった瓦の比較によって法隆寺の方が早く完成していたようである。とはいっても、現在の法隆寺の建築ではなく、現在の西伽藍の下に眠っている「若草伽藍」が四天王寺よりも早く建設されたということである。その若草伽藍が四天王寺式であって、四天王寺よりも古いということなのである。現在の法隆寺の伽藍配置は、当初とは異なり、「法隆寺式」という配置である。実に紛らわしい。

2 寺院の重要建築物とその役割

寺院の伽藍を彩る建物には、次のようなものが挙げられる。「塔」「金堂」「講堂」「回廊」「食堂」「僧房」「中門」「大門」とあるが、寺院として重要なものは、「塔」「金堂」である。



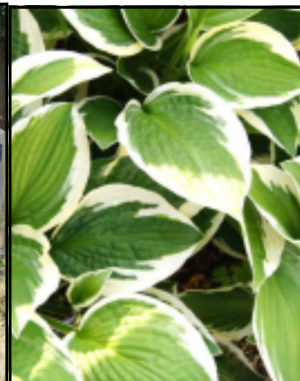
＜インドネシア・ストーパ＞



＜日本・卒塔婆＞



＜橋の欄干の擬宝珠＞



＜我が家の庭のギボシ＞

「塔」は、インドで仏教を作った釈迦のお骨を安置する場所である。インドでは、釈迦のお骨を分け与えて「ストーパ」に埋葬した、したがって庶民が手を合わせているのは、ストーパである。それが、中国、朝鮮を渡って日本に入ってきたときに、日本では形を変えた。墓には、「卒塔婆」として、そこに埋葬者の戒名等が書かれて、供養に使われることになった。橋の欄干には、「擬宝珠」となって使われ、我が家の庭には、「ギボシ」なる植物が育っている。塔の先端のものは、「宝珠」といい、そこから変化したと言われる。

「金堂」は、本尊の仏像を安置し、各種の法要を行う場所にもなる。それ以外は、附属建築と考えてよいと思う。伽藍配置についても、塔と金堂の位置を問題とする。

一般に重要な建築物には、基壇が設けられている。版築を施して、周りを石などで囲って丈夫にして、そこに建築物を建てる。古くは、寺院建築も地下の2m～3mに礎石を設けて、補強のために根石を使って基礎のずれることを防いだ。やがて年代を経るごとに礎石が上に上がって、遂には基壇の上に置かれるようになった。

もちろん、古くは、回廊には、基壇は作られずに掘立柱形式で作られた。



＜和歌山県文化財センター＞



＜岡崎市・北野廃寺・塔の礎石＞

つづく

梯儁と卑弥呼は会っている―拝仮は相見を含意する― (3)

吉川市 堀口 啓一

1 行路途中で引き返したと考えたがる理由1

ここで根本的な疑問を挙げておきたい。

疑問6:行路途中帰還説論者が行路の途中で引き返したと考えたがる理由は何であろうか？

理由を考えてみたが、恐らく次の記述が彼等(特にヤマト説論者)にとって都合が悪いのでは無いと思う。

倭地温暖 冬,夏食生菜(『三国志』魏志倭人伝)

菜の意味を野菜と取るか食品と取るかで文意が変わって来るが、生野菜と解釈するのが一般的ではある。ただし、食品全般と見做して魚介類や木の実を火を通さずに食すると解釈する事も可能ではある(例えば牡蠣は弥生時代から生食されていたと考えているが、吉野ヶ里遺跡では牡蠣・赤貝・田螺^{たにし}の貝殻が出土している^(*))。ここでは生野菜と言う見解を採るが、倭の気候は温暖で冬でも栽培された野菜もしくは野生の植物を食していたと言

^{*}1 『吉野ヶ里と古代遺跡探訪』(高島忠平監修、講談社、1991年)。

う事になる。冬に野外で採れる食用の野草を指しているのかも知れないが、常に一定量を採取出来るかどうかは何とも言えないので、野菜を食用としているのであれば二毛作で冬季に栽培していたのであろう。弥生時代に日本に持ち込まれて生食が可能なものとしては大根、蕪、生姜、菰、茗荷、小松菜と言った物がある（もっとも菰や小松菜は茹でた方が良さそうではある）。小松菜は冬季でも栽培出来るので、二毛作に適していると言えるかも知れない。栽培されていたと思われる植物についても記録が残っている。

有薑(生姜と思われる)、橘、椒、薑荷(茗荷と思われる)（『三国志』魏志倭人伝）

倭地が温暖と書かれているので、想起されるのは九州であって本州では無さそうではある。特に冬の奈良盆地の寒さは厳しく、気温は氷点下まで下がるらしい^{(*)1}。これではとても二毛作は難しいと思う。従って、行路途中帰還説論者（ここではほぼヤマト説論者であるが）は魏使が九州北部の気候や農業状況を倭国全体における普遍的な状況であると誤認した事として済ませたいのであろう。しかしここで次の疑問が浮かぶ。

疑問7：九州北部の冬は温暖なのか？ 二毛作は可能なのか？

九州は漠然と全体的に温暖であると思っている人が多いかも知れないが、実は伊都国や奴国の比定地とされる福岡県糸島市・福岡市は日本海に面しており、冬の寒さが厳しい日本海型気候に属している^{(*)2}。気象庁^{(*)3}の記録^{(*)4}では糸島市や福岡市の冬の気温は奈良盆地程寒くは無いが、それでも降雪はあるし気温が氷点下まで下がる事もあるようだ。更に追い討ちをかける訳では無いが、弥生時代は寒冷化していたと言う見解もある^{(*)5}。となると現代よりも寒かった筈だ。古代では現代のようなビニールハウスは無い訳で、これでは二毛作を行うのは少々難しいのでは無いかと思う。どうやら倭地の気候と九州北部は微妙に噛み合わないように思える。となると次の疑問が浮かぶ。

疑問8：温暖で二毛作を行える場所はどこなのか？

これに対する回答は非常に明快である。この条件に非常に良く適合する候補地が存在しているからだ。それは**筑紫平野**（佐賀県・福岡県）である。筑紫平野は**日本国内で最も二毛作が盛んに行われている地域**なのである^{(*)6}。勿論、現時点で二毛作が行われている事が三世紀の時点で二毛作が行われていた事を示すものではないが、有明海沿岸は暖流の影響もあり寒冷化期でも温暖であったのであろうと予想する（ただし有明海沿岸は昼夜の気温差が大きく、冬の寒さが厳しい事もあるようだ）。倭地の気候描写に対して最も確率の高い候補地であるとは言って良いであろう。どうやらヤマト説論者の努力は水泡に帰するようである。

12 行路途中で引き返したと考えたがる理由2

行路途中帰還説論者が行路の途中で引き返したと考えたがる理由は、もう一つあるよう

^{*}1 『気候からみた奈良県』（<https://www.pref.nara.jp/secure/122080/201205toukei.pdf>）（県民だより 統計から知る奈良、2012年）。

^{*}2 『県政概要』（<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/attachment/232206.pdf>）（福岡県県民情報広報課 令和6年度県政概要（全体版）、2024年）。

^{*}3 国土交通省 気象庁（<https://www.jma.go.jp/jma/index.html>）。

^{*}4 気象庁 過去の気象データ検索（<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/index.php>）。

^{*}5 「邪馬台国の気候」（<https://www.metsoc.jp/tenki/result.php>）（山本武夫、日本気象学会機関誌「天気」（TENKI）19巻No. 9、1972年）。

^{*}6 『統計で見る 九州農業の概要』（<https://www.maff.go.jp/kyusyu/toukei/attach/pdf/181030-58.pdf>）（九州農政局 統計部統計企画課、2024年）。

に思われる。それは女王国への行路記述である。

九州に上陸してからの行路記述は里数が書かれていて非常に克明であるが、不弥国が登場して以降の行程では次のように里数が書かれておらず、代わりに日数が書かれていて記載粒度の変転が著しいのだ。

南至投馬國水行二十日(略)南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日陸行一月

(『三国志』魏志倭人伝)

となると誰もが次の疑問を持つ筈だ。

疑問9:船で20日も航海していて、水や食糧をどこで補充していたのか?

疑問10:陸路を1ヶ月も歩いているのに、無人の荒野が続いて聚落や国は無かったのか?

どちらも説明に窮してしまうのでは無いかと思うが、回答としては「魏使は不弥国や伊都国で帰ってしまったので、それ以降の行路は把握出来ていなかった」と言う事にしたいらしい。しかし、それでは更に次の疑問が浮かぶ。

疑問11:卑弥呼に賜与された鏡その他を途中で放置したのか?

梯儁が行路の途中で引き返したのであれば、絹や百枚の銅鏡をどうしたのであろうか。まさか道中に捨てた訳でもあるまい。

13 一大率は伝送しているので伊都国で手渡せば女王国に届くと言う主張

行路途中帰還説論者は主張する。一大率は伝送を行っているので、伊都国で賜与物を手渡せば女王国に届くので魏使は行路の途中で帰っても問題無いと。拠り所は次の記述である。

自女王國以北 特置一大率檢察諸國畏憚之 常治伊都國 於國中有如刺史

王遣使詣京都、帶方郡 諸韓國及郡使倭國 皆臨津搜露傳送文書、賜遺之物詣女王 不得差錯

(『三国志』魏志倭人伝)

どうやら一大率を宅急便の受付窓口か何かと誤認しているのかも知れないが、当然ながら三世紀に宅配便業者は存在しない。伝送を行うのは使者であって一大率では無いのである。では一大率は何をしていたかと言うと、使者が伝送した際に中身を檢察していたのだ。そもそも一大率は常に伊都国を中心に周辺海域(玄界灘・唐津湾・博多湾か)で活動していたと思われるので、物を輸送するために伊都国から離れる訳には行かない筈だ。一大率は刺史に似ていると書かれているが、刺史の仕事は配送ではあるまい。となると一大率は伝送を行っておらず、卑弥呼に賜与された銅鏡他は梯儁一行が直接持ち運んで卑弥呼の面前に披露したと読解するしか無いのである。

14 卑弥呼は魏使との相見を外交に利用した

行路途中帰還説に近い論説としては、梯儁は女王国に来着したが卑弥呼が相見を拒否したと言う少々不可解な見解もある。根拠は次のようである。

自爲王以來少有見者 以婢千人自侍 唯有男子一人給飲食 傳辭出入

(『三国志』魏志倭人伝)

卑弥呼は姿を見せる事が少ないとあるので、魏使が来訪した際にも会わなかった筈であると言う主張だ。この主張は次の日本書紀における推古天皇の記述と関連する。

時阿倍臣出進以受其書而進行 大伴嚙連迎出承書置於大門前机上而奏之 事畢而退焉

(『日本書紀』卷第廿二 推古天皇)

国書を机に置いて読み上げているが、聞いていた者は推古とは限らないので推古と裴世

清は会っているとは言えないと主張する^{(*)1}。これは更に次の記述との関連する。

既 至彼都 其王與清相見(『隋書』倭國傳)

裴世清は倭王多利思北孤と会っているが、裴世清は男王であると認識している様子が見て取れるので、推古では無いから推古と裴世清は会っていないとの事である^{(*)2}。しかしこれは、

疑問12: ならば裴世清は誰と会っていたのか?

と言う事になるが、この解は厩戸皇子もしくは蘇我馬子と言う事らしい。裴世清が会っていたのは推古は厩戸か馬子であって推古は会っているとは言えないので、卑弥呼も梯儁とは会っていないと言う何とも回りくどい論法のようなのである。しかし、

疑問13: 魏使が来倭したのに卑弥呼が相見を拒否すると言う事があり得るのであろうか?

冊封体制下において冊封国側が宗主国側の使者に会わないと言う事態は許容されにくいように思われる。そもそも魏の冊封を望んだのは卑弥呼側であると考えられるので、特別な理由でも無い限り卑弥呼は相見を受け容れた筈だ。少なくとも推古は一般的には冊封体制を受け容れていないと判断されているので、魏朝から倭王に叙任されている卑弥呼と比べても有意義とは言えまい。

私見では、卑弥呼は狗奴国王卑弥弓呼との折衝を有利に進めるために梯儁との相見を利用したものと推測している。卑弥呼は魏朝からの賜与物が自身の目の前に披露されて倭国王に叙任される晴れの舞台を倭国大人や民衆に知らしめたかったのであろう。そこから更に卑弥弓呼に伝えられる事を期待し、狗奴国の行動を制御させたかったのでは無いか。普段は宮室に籠って出て来なかったと言う生活状況も相まって、姿を見せた事で更に効果を期待出来たかも知れない。卑弥呼が魏使と会うか会わないかにおける得失を考慮すると、むしろ卑弥呼が梯儁に会わない理由は無いと言える。梯儁と会えば利得しか無いので、これで相見しない筈が無い。

15 梯儁と卑弥呼は会っており、女王国は筑紫平野にある

拝仮と言う語の読解に基くと、梯儁と卑弥呼は会っていると判断する他無い。となれば梯儁や張政は女王国まで到達している訳で、行路途中で引き返したと言う主張は全く成立しない。行路途中帰還説論者は自説に都合が悪いからと言って文献読解を恣意的に捻じ曲げてはならない。

なお、倭国の気候や生活に関する描写を読む限りでは、女王国の候補地は筑紫平野であると判断するのが妥当と言う事になる。(完)

■ 前回の会報の目次と話題

- ・ 応神天皇の実在性について
東海市 大島秀雄
- ・ 『日本書紀』から『日本後紀』までの
六国史を読んで
刈谷市 酒井 誠
- ・ 梯儁と卑弥呼は会っている一拝仮は相見
を含意する-(2)
吉川市 堀口啓一
- ・ 稲荷山・江田船山の両鉄剣と「人制」
名古屋市 石田泉城
- ・ 縄文人と犬
名古屋市 石田泉城

■ 例会の予定

当日は平成7年度通常総会を開催します。

- 1 日時 令和7年6月15日(日) 13時半
- 2 場所 名古屋市市政資料館 第4会議室
- 3 次々回以降の予定
7/12、8/10、9/21、10/18、11/16

■ 投稿締切り日 6月24日(火)

送付先 toukaikodai@yahoo.co.jp 石田

^{(*)1} 例えば『古代天皇の誕生』(吉村武彦、角川選書、1998年)。

^{(*)2} 前掲書。